

四月四日、故郷に到着し家族と会いました。戦争は二度としてはならないと、戦死した人達のことを思い起こし、深く心に刻みました。併せて、いまの平和に感謝しております。その平和の陰に如何に多くの人命が失われ、多くの人々の犠牲が払われているかを、いまの若い人々はご存知であろうか……。農民になり、その農民が銃をとり、兵隊となって祖国を守ろうとする愛国心に頭の下がる思いです。

日本の若い人達も平和を守り、祖国を大切にして頂きたいと、心から願っています。

「陸軍三等兵」として南方で

現役軍人として南支防衛

石川県 浅江 喜佐雄

私は大正十四年一月十二日生まれで、平和祈念事業特別基金から銀盃が届けられたのは、丁度七十二歳の誕生日である平成九年一月十二日でありました。

「あなたの先の大戦における旧軍人軍属としての御苦労に対し衷心より慰労します」との、「内閣総理大臣 橋本龍太郎」の書状が添付されていました。

今次大戦の当時、私は船舶輸送業務に従事しておりましたが、次のことが常に脳裏から離れず、自責の念にかられていたのです。それは、輸送中、傷病患者二十人くらいが行方不明になったこと、輸送物資を半分くらい海中に捨てたこと、機関銃をジャングルの山中に隠したことなどがあつたからであります。

そのため、今回の書状・慰労品には、ただただ恐懼感激しているところであります。私も、孫が二十歳を過ぎたので、これを機に、二十歳時代の戦争体験をお話ししたいと思います。

昭和十七年後半から、昭和二十一年五月復員するまでの約四年間、祖国日本のため、太平洋のソロモン海から、南支那大陸を駆け巡ったことなどを細かく申し上げたいのですが、手元にはこれといった資料（昭和十八年九月二十日、乗船が爆沈し、日記、私物一切流出）もないので、日時、場所の不確定な点は御容赦い

ただきたいと思えます。

私が未だ軍隊に入る前の、昭和十七年十一月下旬、石川県から漁船約三十隻が徴用され、広島県の宇品港に集結するよう軍命令がありました。金石、福浦、輪島、小木、七尾の各港からそれぞれ出港しました。その時、私は漁船に乗っていましたから、船と共に軍に徴用された軍属という身分でありました。

宇品港には、全国から百隻あまりの船が集結していて、それらの船の船名は「ウ第何号」と統一されました。昭和十八年三月上旬、行く先も知らされず宇品を出港、奄美群島名瀬から沖縄の那覇に寄港し、油・食糧等の補給をしていましたから、その間に外出許可が出されました。

私達は軍人と違って多少自由行動がとれたので、首里城などを見物しましたが、三月だというのに桜の花が散っており、海水浴までできたという思い出があります。

次の寄港地は台湾の基隆、高雄で、いよいよフィリピンのマニラに向かうことになりました。誰が言った

知りませんが「木の葉船団」と呼ばれ、その数、百数十隻、船の速力も五ノットくらいでありました。

マニラで部隊長の名前が初めて知らされ、部隊長は宮崎少佐で四十三歳でありました。初訓示を市内の有名なルネタ公園で聞きましたが、その内容は記憶していません。

それから一カ月くらい、教育訓練を受けましたが、特に手旗信号は厳しく教え込まれました。訓練で汗をかき、軍の食堂に入ると、マンゴー、パイアなど、生まれて初めて見る御馳走の山でありました。

当時、市内は思ったより平穩でした。戦時手当として一カ月百三十円、八十円は留守宅へ送金されますが、五十円は私の小遣いとしては十分過ぎる額でありました。

ある日、海軍大尉が来られ、顔を見てびっくり。皆が不動の姿勢で敬礼している中、私は「お父ちゃん」と大声をあげました。「何か欲しい物はないか」と聞かれ、マッチの小箱を沢山貰ったことがありました。

そのうち周囲も段々と慌ただしくなり、船のデッキ

や機関室を鉄板で囲むなど、大々的な修理整備がなされ、九二式重機関銃一基が搭載、試射訓練も実施されました。いよいよ第一線の激戦地出航が近いのではないかと感じてきました。

予想した通り、間もなく出航命令が出され、次のような訓示がありました。「お前らの着ている軍服は死装束である。船がやられたら筏でも輸送せよ。敵と遭遇したら撃って撃ちまくれ」と。私も、いよいよ戦闘が始まるな、と緊張せざるを得ませんでした。

セレベス（スラウエシ）島のメナド、ニューギニアのマノクワリ、ホランジャを経由して中継地のウェワークに到着。ここで船団は二船団に編成替えされ、私の船団はラバウルに転進することになりました。今まで長い航海を共にしてきた戦友との送別会では、肩をたたき抱き合って健闘を誓い合って別れ別れとなりましたが、この基地に残った者は、船長以下全員戦死してしまつたことを後で聞きました。人間の運命とは、誠に不可思議なものだ、運隊とよく言われますが、この時、つくづく実感しました。ただただ英霊の御冥福を

祈る次第です。

昭和十八年八月下旬、ようやく目的地ラバウルに到着、港には軍艦三十数隻が投錨、左岸には活火山が煙をたなびかせており、威風堂々とした光景に感涙しました。

ラバウルは大海軍基地であり、南東太平洋の第一線の陸軍の根拠地（方面軍司令部）でもありましたが、到着後約五十日後の十月十二日、連合軍の戦爆連合二百数十機の大空襲が始まりました。それから連日の爆撃で、地上にある形のある物は総て跡形も無く消え失せていったという大爆撃を、身をもって体験し生きていたのが不思議なくらいです。我が大隊本部は急遽ガロベ島に移動、ここを基地として輸送業務につくことになり、海上から陸上業務が主体となったのです。

基地は、ジャングルの中で、昼間はスコールに見舞われ、夜ともなれば一メートルくらいの大トカゲや野ネズミが徘徊、また悪疫の巣という、所謂、文字通りの「瘴癘の地」で、食糧不足と病魔に冒され、戦傷病者も増加してきました。私は大隊本部指揮班付となり、

仕事は伝令、ガリ版刷り、海岸からの水汲みなど、若さにまかせ明るく飛び回っておりました。

その時「〇〇軍属」だと呼び難いので、これからは「〇〇三等兵」と呼ぶことになり、初めて陸軍三等兵の新語を知ったのですが、特に違和感はありませんでした。部隊内でマラリアにかからなかった者は、大隊長と私だけで、不死身だと忽ち有名になってしまいました。時々指揮班長のお供をして野牛狩りなどをしましたが、班長は、今度正規に入隊（現役として入営）したら「ラッパ手になれ、ラッパ手は師団長直属の部署だからなあ……」とよく言われましたが、当時その深い意味は分かりませんでした。

昭和十九年、新しい年が明けて私に内地帰還の命令が出ました。これは私にとり青天の霹靂でありました。国民の三大義務（教育・徴兵・納税）の一つ徴兵適齢期に達したので、部隊長の計らいで、内地で徴兵検査を受けることになったのです。しかし、私一人が内地帰還することは、戦友一同に申し訳ないという複雑な気持ちで一杯でした。

出発に際し「内地へ帰ったら、銃後の人達に、一機でも飛行機を戦線に送ってくれるよう頑張ってくれ」と言われた部隊長の一言が、今も脳裏から離れません。当時既に、制空権は連合軍に握られ、日毎の空襲に我々陸上にいる部隊は毎日悔しい思いをしながら、敵機の攻撃を一方的に受けていたからです。何とか友軍機が敵機を撃退してくれないか、そんな切実な思いが部隊長の言葉にあらわれ、前線將兵の願いでもありました。

私は、ただ一隻残っていた駆逐艦に便乗、トラック島に寄港の予定でありましたが、島は二月中旬大空襲を受けましたので進路をパラオ島に変更、台湾を経由宇品に入港、昭和十九年三月下旬、故郷七塚町木津に無事帰還したのであります。

足かけ二年ぶりでしたので、部落を挙げての歓迎を受けました。そして父の死を初めて知りましたが、前年七月メナドの基地で、父死去の夢を見たのが正夢であったことを思い出しました。帰宅後、しばらく家の農耕に従事しておりました。

六月上旬、繰り上げ徴兵検査（大正十三年生まれと十四年生まれが繰り上げ検査を受けた。従って十九年徴集兵は、二カ年徴兵）が、津幡小学校で行われ、河北郡一円の青年が多数集まりました。私は第一乙種合格で現役入営となりました。七月に母は五十五歳で急死してしまいました。長兄は千葉県の「決」師団、次兄は支那戦線へ、弟は近海の漁船に乗っていて、家族は兄嫁、妹と二人。

私は、前に申したとおり、軍属として南方各地を転戦、大勢の戦友（人間）の死や極限状態を体験したので、我が家の現状について、いつの間にか、あれこれ悲嘆にくれるなどの心境になれませんでした。

そして、間もなく正規の陸軍二等兵として、九月五日、東部第四十九部隊機関銃隊に入隊したのです。初年兵教育直後に、金沢師団管区下で編成された独立歩兵島村大隊に転属、翌二十年一月十日、金沢駅から終戦の地、南支那白耶士灣澳頭港に向かって勇躍出陣しました。

その日も雪の積もった厳寒の夜で、灯火管制の中、

軍靴を踏みしめて営門を出ました。我々初年兵には戦局の情勢は一切分からず、何処へ行くのか知るよしもありませんでした。目的地澳頭港は、支那事変下、皇軍がかつて上陸した南支バイヤス湾の一漁港で、対岸には香港があり、重要な要地とされていました。米英軍の大陸上陸を想定、これを撃破するべく我が部隊は急遽派遣されたのであります。

部隊は金沢を後に博多から朝鮮の釜山に上陸、一路北上、山海関を通過し、徐州から津浦線を南下、途中米軍機の機銃掃射に遭遇しつつ、中支上海の呉淞港に到着、装備を補充し、一カ月後の昭和二十年三月上旬、船団は東支那海沿岸を航海、汕頭港の対岸河浦に上陸、休む間もなく行動開始、陸豊、海豊、淡水を経て、四月中旬目的地「澳頭港」に到着したのであります。

約一カ月間、重装備で、炎天下の中、熱射病、マラリア、赤痢、風土病と闘いながらの難強行軍でした。当時、制空海権は米極東軍の掌中であり、海上輸送は危険極まりなく、大陸横断の大迂回作戦であったことを後日知り啞然としたものです。

澳頭港地区は共産新四軍の支配下の真っ只中にありました。我々はただちに敵上陸を水際で殲滅すべく、艦砲射撃に耐えられるよう洞窟陣地構築に没頭しましたが、硬い岩磐で予定どおり作業は進まない。その上、台風季節で嵐が吹き荒れ、作業小屋は何回も吹き飛ばされましたが、各隊はただ黙々と掘り進んだのであります。

六月中旬頃からB29の飛来が急に多くなってきましたが、我々陸上部隊には全く目もくれず、沖合の艦船を攻撃、「あっ」という間に黒煙を上げて撃沈していく様を望見して、その壮絶さと、米軍の物量作戦に我々一同言葉もありませんでした。このような悪条件のもとに、日夜洞窟陣地構築に体力の限界ぎりぎりまで、心血を注いだ作業が終戦日まで続いたのであります。八月中旬、武運つたなく停戦、神国日本の敗戦は、当初誰一人として信ずる者はいなかったのですが、敗戦処理作業が現実となりました。これから先の不安、憂色の空気がだんだん漂ってきました。また一方、内地は爆撃で廃墟となっているという。日本軍は全員処

刑されるだろう。それなら、大陸を縦断して釜山まで行軍し、筏で玄界灘を渡って内地へ帰ろう、などと様々なデマが乱れ飛びかいました。

敗戦の軍隊は一カ所に長く留まることなく、武装解除のため国府軍駐留の平湖に移動。兵器、弾薬、被服など一切が接収されて丸腰になりました。日夜、我が身以上に手入れをして大切にしてきた兵器が、広場に野晒しにされているのを見て、敗戦の屈辱を痛感させられました。一方、共産軍からの降伏勧告、示威があちこちでなされたようであります。

十月、東莞に移住し集中営生活、いわゆる俘虜抑留生活に入りました。この頃、中国大陸では、国府軍と共産軍の内戦が日に日に激しくなっていたようです。集中営生活では強制労役にかり出されたり、空腹と病魔との闘いで、星空を見上げ望郷の念にかき立てられるなど、悶々の日の連続でありました。

昭和二十一年四月上旬、待ちに待った復員船に乗船これで内地帰還確実だと一同感涙にむせびました。虎門港を出発、九龍、香港を遠望し、東支那海に出たの

であります。台湾沖で船内でコレラが発生、多数の死亡者や患者が続出、内地帰還を目前にして、悲愴感と無念さが込み上げました。やがて、神奈川県浦賀港に碇泊、一カ月余、洋上で隔離されました。必勝を確信し征途について以来一年四カ月、夢にまで見た懐かしい祖国の地を踏んだのは、昭和二十一年五月二十日でありました。その感動は未来永劫に忘れるものではありません。

当時、我ら若者は、国民の義務として兵役に服し、祖国日本のために一身を捧げることを誇りとしておりました。私の青春は、前段は軍属として海上船舶輸送に、後段は正規の陸軍軍人として、南支那大陸を疾駆していたのであります。数年前から体調を壊し、現在言動がやや不安定ですが、妻や澳頭会戦友のご協力を得て体験を話すことができました。

【参考資料】

解説（澳頭）

第二百二十九師団（振武第八六四一部隊）

昭和二十年五月二十日 軍令陸甲第六十五号により、同年一月、日本内地において臨時編成した「波雷独立混成旅団を基幹として南支那、広東省淡水鎮付近に於いて編成完結。五月二十日、八月十五日 広東省淡水に於いて白耶土（バイヤス）並びに大鵬灣沿岸地区に於ける警備並びに陣地構築に任ず」。

同師団は、南支汕頭地区に於いて寡兵よく同地周辺の作戦、討伐、援蔣ルート遮断の任にあたった。独立混成第十九旅団（潮兵団）の独立大隊と内地編成の独立混成旅団をもって編成され、連合軍の南支上陸阻止の任について終戦となった。

その編成は、

師団長 陸軍中将 鶴沢尚信

歩兵第九一旅団司令部

独立歩兵第九八、第二七八、第二七九、

第二八〇大隊

歩兵第九二旅団司令部

独立歩兵第一〇一、第五八八、第五八九、

第五九〇大隊、第一二九師団砲兵隊、同工兵隊、

同輜重兵隊、同通信隊、同兵器勤務隊、同野戦病院、同病馬廠、同防疫給水部

である。

同師団は第二十三軍隷下にて淡水に位置す。体験記執筆者の所屬部隊は左である。

独立歩兵第五八九大隊長陸軍大尉 島村清次

昭和二十年一月十日 昭和二十年陸亜機密第十三号に依る仮編成要領に基づき金沢、富山、松本に於いて仮編成完結、波雷旅団独立歩兵第五大隊（大隊長以下一五三四人）として内地出發。

同年五月二十日 軍令陸第六五号により第二百二十九師団編成完結時、独立歩兵第五八九大隊（長陸軍大尉 島村清次以下九九五人）となる。

同年一月二十八日 上海着。同日より上海呉淞に在りて待命間の諸訓練実施。二月二十八日上海港出發。

三月四日 南支汕頭港上陸、同月六日 独立混成第十九旅団長の指揮下に入り、汕頭付近に在りて潮汕地区警備。

四月七日〜五月十三日 広東省惠陽県澳頭付近に在

りて白耶士灣岸警備（白耶士灣—昭和十三年十月十二日 日本軍は同湾に上陸し、広東を攻略した）。

五月二十日 編成完結 独立歩兵第五百八十九大隊となり第二十三軍戦闘序列に編入せられ、第二百二十九師団長に隷屬し、依然澳頭地区に在りて白耶士灣沿岸警備。

八月十五日 停戦詔書受領。直ちに陣地を撤し、九月二日 中国側の司令に基づき広九鐵路付近に集結、十月七日 平湖において中国側に兵器彈藥資材、糧食、衛生材料、馬匹等を移譲。

九日 平湖出發、二十三日 広東省東莞県東莞に着 昭和二十一年三月二十九日まで中国軍監視下、東莞付近に於いて集中營（收容所）生活をなす。

三月三十一日 虎門集結、四月九日 輸送船「V〇八二号」にて虎門港出發、四月十七日浦賀港入港（コレラ発生のため船中に待期）、五月二十日 浦賀港上陸、同二十六日 復員式挙行部隊解散。

同部隊残務整理官島村、片桐吉誉大尉は「外地派遣に方り完全なる独立歩兵大隊として編成、整備を完整

せしめたるにも拘らず仮編成部隊として派遣せられ、
現地到着三カ月を経て初めて軍令に基づく臨時編成部
隊に編入せられたるは特異なる事象と認む」と、復員
局に提出せる部隊略歴に記し、戦わずして終戦を迎え
た無念さと、軍命令と実施に至る間の心の不満の一端
を感じとることができる。